金目川水系 せせらぎ通信 Vol.3

編集：金目川水系流域ネットワーク世話人会　発行：神奈川県湘南地区行政センター　発行日：2002年6月24日

●マップはここにあります！
平塚市・藤沢市・茅ヶ崎市・秦野市・伊勢原市・寒川町・大磯町・二宮町の広報窓口県政情報センター、各地区県政情報コーナー他。
詳しくは、裏面くネットワークの窓口>にお問い合せください。

金目川源流へ行って来ました！

マップを持って

——「春嶽沢（はるたけざわ）・髭僧（ひげそう）の滝」を訪ねて

1時間目

髭僧の滝の前で

今回のウォーキングは「はだのネイチャーウォッチングクラブ」に担当していただきました。
金目川源流部の「髭層(ひげそう)の滝」から「蓑毛(みのげ)」に下り、「蓑毛自然観察の森」*に到着。

2時間目

緑水庵

緑水庵では、地域の歴史に詳しい武勝美さんからお話を伺いました。

＊「蓑毛自然観察の森」は、秦野市から委託を受けて、「はだのネイチャーウォッチングクラブ」が管理をしている雑木林です。

川に学ぼう！

せせらぎゼミナール

東海大学 教養学部 人間環境学科 自然環境課程

●金目川の汚れは？

震生湖の水質

秦野市にある震生湖は流入、流出河川がない完全閉鎖性水域で、関東大震災時に誕生した日本で一番新しい自然湖です。震生湖は釣りなどのレジャーが盛んな湖ですが、釣りによるまき餌などによって湖内の富栄養化が急速に進行しています。そのため、震生湖の透明度は冬場でも1m、夏場においては70cm前後しかありません。震生湖の水深は約9mなので太陽光が上層にしか届かず、上層と下層で大きな水温差が生まれます。夏場では、水深約7～8mで水温が著しく変化する層が現れます。一般に、このように水温が急激に変化する層を「水温躍層(すいおんやくそう)」と呼びます。この「水温躍層」が生じると、層の上層と下層の水の循環が起こらなくなります。震生湖は、富栄養化が進行していますので、上層からの酸素が供給しないまま、下層では有機的な汚染物質の微生物による酸化分解が進行し、湖底が無酸素化して生物の生息できるような環境ではなくなってしまいます。

（藤野研究室：久保、福山、高井、門多、堀井）

夏の金目川の植物と河川水の関係

昨年の8月、大学近くの河川敷には、草丈1mを超える草むらがハッチ状に茂っていました。その1つを2m×2mの方形枠で囲って刈り取って調べた結果は次のとおりです。

植物体(地上部)乾燥重量：2.3kg、その中の窒素集積量：30g、リン集積量：8g

生えていた植物(乾燥重量の順)：オオブタクサ、オオアレチノギク、セイタカアワダチソウ、アレチマツヨイグサ、ヨモギ、コセンダングサ、コマツヨイグサ、オオイヌタデの8種で、ヨモギとオオイヌタデ以外は帰化植物。

なかでもオオブタクサは草丈(2.9m)、乾燥重量(46%)、元素集積量(N：57%、P：54%)と抜群で、大型の1本約0.4kgのなかに5gの窒素と1gのリンを含んでいましたが、これは窒素についてみれば金目川の水1m³弱、リンに関しては10m³強を浄化していることになります。

（佐々木研究室：天野、小野澤、平田）

作ろう！

流域の自然マップ ③

平塚市博物館　浜口哲一

菜の花地図2002

前回、金目川に多く見られる「菜の花」について情報提供を呼びかけました。特に情報が寄せられなかったので、神奈川県植物誌調査会の馬鳥敏子さん、松下弓子さん、山口育子さんに手伝って頂いて平塚市内を中心に調べてみました。その結果、地図に示したように4月の金目川水系はいたるところ菜の花でいっぱいであることが分かりました。

歩いてみた感想として、①水面から1mくらいの高さがある平坦な中洲や川原に多いこと、②水際や、石がごろごろしている場所には少ないこと、③ヨシやオギがよく茂っている所には少ないことなどを感じました。おそらく、菜の花は泥が深く堆積し、富栄養的な場所に茂っているのでしょう。

それが群生している場所が多いことは、金目川の水が有機物で汚れている、または過去に相当汚れていたことを示している可能性があります。なお、種類としては、少なくとも群生しているものはセイヨウカラシナ1種類でした。また、金目川の本流では、それに混じって白い花のダイコンがたくさん見られたのが意外でした。

菜の花が群生していた河原は、5月には一面緑になり、ネズミムギのようなイネ科植物が優占しています。

そうした場所の四季の変化にも注目したいものです。

＊情報がありましたら、下記の<ネットワークの窓口>までお寄せください。

知ってる？知りたい…流域のこと　その三

金目川水系の基礎知識

Q 金目川水系というけれど、そもそも金目（かなめ）の名の由来は？

A 金目(かなめ)の名の由来には、いくつかの説があります。本号3ページでは「カナヒ」という説を紹介していますが、ここでは「カネエ」からの訛語(かご)という説を紹介しましょう。「金江」を「カネエ」ともいい、古くは金目川を金江川と書いたものもあるそうです。この金江川とは、金気を多く含んだ水が流れる川という意味を表しています。それを裏付けるかのように、金目川流域の第三紀層やローム層からは、水酸化鉄がにじみ出た赤さびた水(金気の水)がよく見受けられるそうです。カネエ→カナエ→カナメと転訛(てんか)し、カナメに金目の文字を当てたのかもしれません。金目川水系流域のいろいろな名の由来を調べてみるのも面白いですね。人々と自然との関わりや歴史や文化など、地域の特色が発見できるかもしれません。

編集後記

●早春の水源は、水も緑も美しく、体験した一同に希望を感じさせてくれたのでは？今年度も、この水源での共感を原点に、ネットを広げましょう。（佐々木）

●水の中の目で見えないゴミ、目で見えない生き物たちのことを考えていこう。（田端）

●今回の「『髭僧（ひげそう）の滝』を訪ねて」の目的は、過去に鉄砲水の被害を受け、その防止に砂防堤、砂防ダムが設置され、その役割や「金目川」の由来、歴史的背景の話をお聞きするというものでした。第3号はその原稿を中心に編集しました。（嘉悦）

●神奈川県は水源の森づくりに全力をあげています。県民一人一人の水への再確認が必要な時です。（浅見）

●源流探検。急用で参加できず。せめてもの慰みは、編集作業に関わること（^^;）次回は参加するぞ！（二見）

<ネットワークの窓口>
神奈川県湘南地区行政センター企画調整課
〒254-0073　平塚市西八幡1-3-1
TEL.0463-22-2711 内線212～214　FAX 0463-23-0599
E-mail shonanac.0024.kikaku@pref.kanagawa.jp

★情報誌の編集スタッフ募集

金目川水系流域ネットワーク世話人会では、一緒にこの通信を作ってくださるスタッフの方を募集しています。興味のある方、やってみたいと思われる方は、左記の<ネットワークの窓口>までご連絡ください。

R100

金目川 リポート2

例年より桜の開花の早かった3月下旬、秦野ビジターセンターの登坂克男さんに保安林や原生林のお話を伺いながら、雨上がりの春嶽沢・髭僧の滝(秦野市蓑毛)を訪ねました。

DATA
歩いた日／平成14年3月23日(土)　9：00～12：30
目的地／金目川源流「春嶽沢・髭僧の滝」
天候／曇天
参加人数／約20名

ところどころで説明を聞きながら歩きました

1時間目：野外授業

髭僧の滝(ひげそうのたき)

出発してからおよそ40分、ついに到着！
私たちの水道水がここから流れていると思うと、感慨もひとしおです。

中国にも金目川のような川がたくさんあるので、帰国したらその水源を訪ねてみたい。

この次は、さらに上流まで見てみたい気持ちです。

水源地の看板

天然の水を飲んだら、おばあさんの家を思い出した。

かろうじて開発からのがれた川を守るのが、今後私の生きる糧ともなるものと確信しました。

全国名水百選の看板を過ぎ、いよいよ水源へ。

蓑毛から歩き始めたところ

大きな石がごろごろ。

この辺りから上は昔ながらの自然の流れがあり、水音もなつかしい。

ヤビツ峠の岐路

洪水や山津波を防ぐ砂防堤を見ながら髭僧の滝へ。

放課後

まだまだ帰りたくなかった有志が、はだのネイチャークラブの方の案内で「蓑毛自然観察の森」を歩きました。

きれいな水を守りたいね

今回ウォーキングを担当しました！

「はだのネイチャーウォッチングクラブ」

▲会報

「蓑毛自然観察の森」をフィールドにして活動を始めてから10年になります。活動日は、毎月第3土曜日で、定例会、自然観察会そして森の観察会を行っています。自然観察会「森を歩こう」は季節ごとのテーマを決め、午後1時～3時まで行っています。自由参加・雨天決行です。

自然からのメッセージを多くの人に伝えられたらと考えています。また、森の動植物・昆虫・クモの調査・植生調査を行ったり、毎月の会報「こもれび」を発行しています。

森の管理は、下草刈り、落ち葉かき、観察路の整備・伐採などを行っています。会員は現在20名です。

＊連絡先：中沢和子
秦野市堀川626－10
TEL.0463－88－6830

▲自然観察会「森を歩こう」

▼観察会「落ち葉を使ったアート」

金目川源流　春嶽沢メモ

春嶽沢水源の管理は？

春嶽山は昔から治山治水が必要な所で、明治末期から造林・砂防事業が行われました。昭和26年には、平塚・秦野・伊勢原による「金目川水害予防組合」が設立されました。さらに昭和58年には約137haの所有地を得て、現在まで森林の育成に努めています。しかしこの土地は、気候が寒冷で風も強く、植栽された木の育ちは非常に遅いそうです。

(金目川水害予防組合　設立50周年記念誌から)

平塚漁協、水源地に植樹

「森は海の恋人」というわけで、金目川の水の質・量を心配した平塚漁協では、平成11年春、秦野市森林組合から提供されたブナの苗木100本を、水源部に植樹しました。海抜0mの暮らしから、780mに登り、慣れないせいで足が痛くなったとか。苗木は鹿の食害除けネット付きの丈50cm程のものだそうですが、無事育ってブナを中心にした自然林が再生されるといいですね。

(平塚漁協専務理事　渡辺孝)

春嶽沢の取水量は？

秦野市水道局は春嶽沢の湧水を日平均770ｔ取水して蓑毛と寺山の一部に給水しています。湧水だけを水源とする水道は、秦野でもここだけで、全市への給水量が日平均6～7万ｔということですから、蓑毛は「秦野の名水」を水道水として飲める大変恵まれた地域なのです。

(秦野市水道局総務課のお話から)

2時間目：室内授業

金目川ほんとは金日川

まほら東・案内人　武　勝美

金目川は大山に連なる春嶽山(秦野市蓑毛)の瀧の沢から流れ出ています。

この**「春嶽山の山中に清水があり、これを閼加水(あかみず)といい、大山石尊・大山阿夫利神社に供えるものとしている」**と新編相模風土記稿（天保12年/1841年編）に記されています。金目川の源流の紹介です。この新編相模風土記稿は巻之三で金目川に**「加奈為可波(かないかは)」**、巻四十二で**「加奈比可波(かなひかは)」**と読み仮名をつけています。

江戸時代、秦野盆地は大山詣でをする人がたくさん行き交ったようで、その旅人たちのための道標が今も市内に29基見られます。それらの道標の中に次のような碑文のものがあります。

▲武さん(中央)を囲んでお話を伺いました

▼蓑水滝わきの水車小屋

1.秦野市鶴巻南3-13-21の《道標》(1747年建立)に
　『左　かない道』
2.秦野市名古木1018番地の《地蔵》(1765年)の右面に
　『かない道』
3.秦野市曲松1-6-7の《道標》(1796年)の正面に
　『左　かなひかんをん道』
4.秦野市渋沢1802番地の《念仏供養塔》(1804年)には正面に
　『かない観音』

「かない」「かなひかんをん」のいずれも金目観音(金目山光明寺)への道案内です。

今、私たちが金目川（カナメガワ）と呼んでいるこの川は、少なくても1840年代までは「カナヒカワ」あるいは「カナイカワ」と呼ばれていたのです。なぜ金目が「カナヒ」「カナイ」と読めるのかは次のように説明されているのです。

この川はカナヒカワと呼ばれるとおり「金日川」という文字が与えられているのです。ところが、ある日、ある時誰かが書類を作成した折り、『日』を『目』と誤記してしまった…。

「カナイ」は「カナヒ」の発音上の変化からうまれたものでしょう（カナヒは発音しにくいですから）。

地名にはそれぞれ由来があります。川の名もまたそう呼ばれる根拠を持っているはずです。神奈川は「上無い川」をその由来にしています。金目川の元である金日川の「カナヒ」あるいは「カナイ」にはどのような意味があるのでしょうか。紙数が尽きました。その話は又の機会に。